

『男色大鑑』における武家男色の在り方 武士道と女色批判

文21-0295 古比谷真帆

目次

①-1 『男色大鑑』 作品説明

②-1 『男色大鑑』 と武士道

②-2 近世にて、代表的な武士道

②-3 『男色大鑑』 における「忠義」の示し方

(例：『男色大鑑』 1巻4話「玉章は鱸に入れて通はす」)

➡争点解説

③-1 『男色大鑑』 と女色批判

④ 『男色大鑑』 における武家男色の在り方

①-1 『男色大鑑』 作品詳細

- 筆者：井原西鶴
- 成立：貞享4（1687）年
- 構成：8巻40章

巻1から巻4までは武家社会の衆道

巻5から巻8では歌舞伎社会における衆道

- 作品概要

日本各国から衆道（＝男色、男性同士の恋愛）の話を集め、それらをまとめて短編集のような形で展開している。巻1から巻4までは武家社会の衆道、巻5から巻8では歌舞伎社会における衆道と分けられている。

②-1 『男色大鑑』 と 武士道

『男色大鑑』について、武士における男色の展開には以下のような特徴が挙げられる。

- ・ 美少年が「若衆」として地位のある者に見初められる
- ・ 若衆側に衆道の心得が根付いている
- ・ 切腹などの命を懸けた過激な選択を最初に提示するのは若衆側である

このような自身の命をかけた姿勢は、相手への（命を尽くすほどの）忠義を示す意識が非常に強いことに基づいている。「忠義を示す」ことは、「自らの死をいとわない」姿勢に繋がるのである。

この「忠義」こそが武士たちにおける「男色」の本質であり、「武士道」の本質である。

②-2 近世にて、代表的な武士道

①『山鹿語類』より「士道」的武士道

儒学者 山鹿素行の思想をもとにした武士道の教科書。「武士の在り方」を説く内容になっている。「死」に関しては、「たった一つの命をひとつのことに懸けて死に後悔しないのは義である」という記載があり、**命を懸けることに関しては肯定的である。**

②『武道初心集』的武士道

兵学者 大道山友山による書。教科書の役割を担っていた。しかし「死」に関しては、「命をなげうってでもしっかり勤めあげる者こそが殉死よりもよい」という記載があり、**命を懸けることに否定的である。**

③『葉隠』的武士道

山本常朝による書。上2作と異なり教科書というよりは思想書に近い。**全体を通し「死」に対して肯定的である。**「忠義に背くような場面にあったら躊躇わずに死を全うせよ」「いざというとき躊躇わないためにも日頃から覚悟を持って」という考えが大きく根差しており、**仇を討たないことは不義であり、武士道に則っていない**とも言っている。

②-3 『男色大鑑』における「忠義」の在り方

(例：『男色大鑑』一巻四話「玉章は鱸に入れて通はす」より)

若衆：甚之助　　権九郎：念者（若衆の相手）である上級武士

伊兵衛：甚之助に横恋慕する下級武士

（権九郎が甚之助から「他人（伊兵衛）の恋文を受け取った」という相談を受けて）

「下々の者だからと侮ってはいけない。命があってこそお互い楽しめるのだ。相手の心が深く安まるような返事をしなさい」

といった。（甚之助）「深く契約したからには、たとえ殿様の御意でも従うものか。**覚悟して権九郎を討ち果たそう**」と思ったが、「まず伊兵衛を武運にまかせて討ち果たしてから、返す力でこの男も生かしてはおくまい」と腹を決めた。

例における争点

(若衆はなぜ怒ったのか)

- ・ 「相手がいる身にも関わらず他の者から恋文を受け取った」という自身の行動
- ・ それにも関わらず、恋文の主を尊重するような念者の姿勢

これら「**念者への忠義の裏切り**」「**やり返さない姿勢**」は**武士道に反する**。また、「**2**—2 近世における、代表的な武士道」の「『葉隠』的武士道」の考え方とも通ずるものがある。

総合して、若衆の怒りは「**忠義への裏切り**」に起因しているのではないだろうか。

③-1 「女色批判」と『男色大鑑』

『男色大鑑』では「女色批判」描写がよく出てくる。

「この事を思うと、**女色と違って男色は、格別に味のあるものである。女はその場かぎりのものだ。**若衆の色香というものは、この道に徹しなくてはわかるものではない。」

（4巻4話「眺め続けし老木の花のころ」）

しかしこれらの「女色批判」描写が話の内容に影響を与えているかと問われれば否である。これらは、「若衆」や「男色」の美しさ、正当性を引き立てるための装置の役割を担っている。

『男色大鑑』では武家社会における恋愛の在り方において

- ・ **しがらみに溢れた「男女の結婚」**と、
- ・ **「自分たちは深い絆で結ばれているのだ」「忠義を示す尊い行いなのだ」という「男色」**

という対比がなされているのである。

4

『男色大鑑』における武家男色の在り方

『男色大鑑』における武家男色はこれら2つの考えのもと成り立っており、それぞれ以下の役割が振り分けられている。

- ・「**武士道**」

死をいとわぬ姿勢をとることで、「男色」の精神性が高いことをあらわす。

- ・「**女色批判**」

「男色」という行いが武士にとって社会的意義のあるものだということや「若衆」の美しさなどを強調する。

これらの要素が『男色大鑑』の作品内での「男色」、そして「若衆」への高い評価に繋がっていると言えるのではないだろうか。